

# 日本の早期開教におけるポルトガル商人の役割

劉 小 珊

## The Roles of the Portuguese Businessmen During Early Preaching in Japan

LIU Xiaoshan

### Abstract

The arrival of St. Francisco Xavier, founder of the Japan's Jesuits, in Kagoshima in 1549 opened a brand-new chapter in Japan's Christian missionary history. After that, countless Jesuits in Japan exerted their utmost efforts to the Jesuits' mission and stamped their names on the page of missionary history. By their efforts, the influence of the Jesuits was successfully expended to Bungo, Hakata, Hirado and Kyusyu. Nevertheless, all the while, there were few studies on the history of that period, to say nothing of the studies on Xavier and his multitudinous advocators, without whose supporting, his glorious achievements would be impossible. This year is the anniversary of Xavier's 500-year birth. As a reason, it is of great significance to make a chart of the initial history of Japan's Jesuits which is three-dimensional and profound.

キーワード：日本の早期開教、ポルトガル商人、フランシスコ・ザビエル、キリスト教

**Key words:** Early Preaching in Japan, Portuguese Businessmen, Francisco Xavier, Jesus Christ

1549年8月15日、聖母マリア被昇天の祝日にイエズス会士フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸した<sup>1</sup>。彼は、布教のための入念な準備をして日本にやって来たのである。ザビエルの鹿児島の初上陸は、キリスト教が本格的に日本島国に伝えられた最早期だと考えられた。ザビエルが東洋の日本に来ることになったのは、単なる偶然によるものだが、歴史とは結局偶然が集積したものかも知れない。カトリック教会において、ザビエルは信者の模範であり、神と人間との間であって、人間の祈りの神への取り次ぎ手と位置づけられ、崇敬の対象とされている聖人とされている。ザビエル、及びその日本開教に関する先学の研究を振り返りながら、16世紀以来おびただしい論文や研究書が出版されてきた。この数多くの研究の中で、もっとも気に入ったのは、ドイツ人ゲオルク・シュールハンマー神父と日本史学者岸野久という二人の研究である。イエズス会士ゲオルク・シュールハンマー神父(1882~1971)のザビエルに関する研究は、質、量ともに頂点に立つものである。神父の研究は、『ザビエル書翰集』、『シュールハンマー著作集』、『ザビエル伝』に集大成されている。ドイツ文献史学の伝統を踏まえた実証的研究方法によって、ザビエル研究は学問的なレベルに達したとされている。今日に至るまで大きな影響を与えており、世に存在するザビエル研究は大なり小なり、シュールハンマー著作のおかげを蒙っていないものはないと言っても過言ではない。

史学者岸野久は、日本史学界で熱心にザビエル研究に従事する一人である。氏は、かつてローマに滞在していたことをきっかけにして、ザビエルに関する研究の道を歩き始まったようだ。その著作といえば、『西欧人の日本発見——ザビエル来日前日本情報の研究』と『ザビエルと日本人』という2冊の大作がある。岸野の研究視点は、従来の史学者と違って、16世紀の現実に生きた宣教師としての、人間ザビエルを歴史学の立場から論じたので、多角的、かつ多面的で、新たなザビエル研究の出発点と言ってもよい。

現在までの多くのザビエル研究に共通する特徴を挙げると、ザビエルに対する姿勢として、教会の基準とされた聖人ザビエルという枠組みをもって16世紀の歴史的人間ザビエルを捉えることで、これは教会の立場に立てば当然のことである。聖人ザビエルは太陽の如く、あまりにも眩しく輝いている存在なので、周囲のものが見えにくくなっている。確かにザビエルは卓越した宣教師ではあるが、彼を支えたさまざまな人々がおり、彼らの協力なしには何事もできなかったはずである。本稿は、ザビエルの来日前後に会ったポルトガル商人を正式に位置づけ、その役割を明らかにする。それによって、ザビエルとポルトガル商人との関係、その多くの商人の協力と支援の下で行った活動を正当に評価することができるであろう。このような作業はザビエルの一人の舞台ではない、立体的で厚みのある初期キリシタン教会像を描く手がかりになるものとする。

—

1543年、ポルトガル人の初来日からザビエルの来日まで、有名、無名のポルトガル人が日本島国へやってきた。彼らは貿易のために来た商人とその関係者であるが、滞日中の彼らの意識

的あるいは無意識的な信仰行為は、はからずも日本社会にキリスト教を伝えることになった。このことについて、ポルトガル人宣教師ジョアン・ロドリゲス通事は、『日本教会史』において、

ポルトガル人は、日本において取り引きをはじめて5、6年のあいだに、日本の人たちとの接触によって、この人たちにわれらの主なるデウスの国についていくぶんかの知識を与え、そして日本人の信奉している宗派と異なった御法があり、人間は来世においてその掟によって救われるだろう、ということをしるさせたのであった。<sup>2</sup>

と述べて、ザビエル日本開教の露払い的役割を果たしたポルトガル人の活動を指摘している。岡田章雄氏も、『キリシタン・パテレン——布教と俗信』において、

ポルトガル人がはじめて種子島に着いた1542年(天文11年)以来、九州地方の港には年々その国の商船が入っていたのだから、土地に住む人々が、ザビエルの渡来に先立って、船員たちを通じてキリストの信仰やそれに附随した文化について見たり聞いたりしていたことは想像される。<sup>3</sup>

と述べ、ザビエル来日以前のキリスト教の伝播を指摘している。

このように、古くは17世紀の宣教師ジョアン・ロドリゲス通事、近くは岡田氏によって指摘されているにもかかわらず、来日したポルトガル商人たちの活動とザビエルの日本開教との関係をこれ以上深めようという研究は内外とも少なかった。その理由はさまざまであるが、ポルトガル商人と言えば、巨利を貪り、自己中心的な輩という印象から、商人の活動と宣教師の布教とは相容れないものとイメージされたのは、その大きな理由かもしれない。ところが、日本開教とポルトガル商人の役割について考えてみるのも意義あることであろう。いかなる商人がザビエルの日本開教と直接・間接にかかわったか、彼らがいかなる活動を行い、ザビエルの日本開教にいかなる貢献を行ったのか、について明らかにしたい。

## 二

1543年以降、ポルトガル人商人は主として南九州に来航したが、中には豊後へ向かう人たちもいた。1578年10月16日付白杵発のフロイス書翰によれば、領主大友宗麟が16歳の時(1545年)、中国人のジャンクで府内の近くの港に6～7名のポルトガル商人が来航し、彼らの中で、ジョルジェ・デ・ファリアという人があり、富商で、リーダーらしい人である。このファリアは、1577年6月6日付白杵発のローマのイルマン宛のフロイス書翰に登場するポルトガル人である、とシュールハンマー師は推定しているので<sup>4</sup>、これに従って論を進めよう。同上書翰にファリアのことは次のように記されている。

…チナから日本へのナオ船の渡来の初期、当地の私(宗麟のこと)のもとに一人のポルト

ガル人三年間滞在した。彼は鉄砲で傷をおった私の弟、山口の王（晴英）の手を治療した。いつも私は彼に私の内心が分からないように隠して、ポルトガル、インドの状態や支配の詳細について、また特に宗教達の規則や生活について尋ねた。そしてそのポルトガル人の言うことが、真実と違わないかどうか、私はわざわざ26年前に異教徒の私の家臣をインドへ送った（1551年ザビエルと共にインド副王のもとへ派遣した使節のこと）。彼は、あちらで目にしたこと（体験）がもとでキリスト教徒になった。私は、彼（の話）によって、先のポルトガル人が私に語ったことが、まだ控えめであることを知った。<sup>5</sup>

以上により、1545年頃から3年間、豊後にポルトガル商人ジョルジェ・デ・ファリアが滞在中であったこと、宗麟とファリアとの間で、ポルトガルのインド支配などの政治的、軍事的なテーマ及び宗教家の生活や規則などの宗教的テーマが話題となっていたことが分かる。確かにこの史料により、ポルトガル人の宗教が宗麟の一大関心事となっていたことは分かるが、なぜ、彼が関心を持つに至ったか不明である。この点を明らかにしてくれるのが、1578年のフロイス書翰である。

当地にディオゴ・ヴァスというポルトガル人がやってきた。彼はここに5年間滞在して、もう日本語を話し、理解した。この人は朝晩、書物あるいは数珠を用いて常に祈っていた。私（宗麟）は、何をしているのか、日本のカミ（神）やフォトケ（仏）を礼拝しているのかと尋ねると、彼は笑って、天地の創造者で、この世の贖い主しか拝みません、と答えた。私はそのことがとても気に入り、いつも私の心にしまっておいた。そして、この人は俗人で商人であるのに、商取り引きすら祈祷やお祈りの準備と実践を奪わないのは、疑いもなく、彼の崇めているデウスがとても重要なもので、非常に価値ある玄義であるに違いない、と私は考えた。<sup>6</sup>

ヴァスは、ザビエルの日本滞在中（1549～1551年）豊後にいたことになり、豊後でザビエルと会っていることは間違いない。この後、彼は1552年上川島で病気を患い死亡したザビエルに自らの小屋を提供している<sup>7</sup>。1556年、ヴァスが平戸へ来航し、1568年また豊後へ来て、司教カルネイロ宛の宗麟の書翰をマカオに持参していることから、16世紀の中頃東アジアで活躍した日本通のポルトガル商人の一人であったと思われる。

この商人ヴァスは朝晩の一定の時間、祈祷またはコンタスを用いてお祈りを捧げることを常としていた。キリスト教徒の彼にとってお祈りは日常的な活動の一部で、何らか特別なことではなかったが、日本では宗教家が行うようなことを一介の商人が行うことを目撃した宗麟は大いに心を動かされ、ヴァスの信仰とその対象に興味と関心を抱いたようだ。このように滞日中のポルトガル商人たちの日常的信仰ぶりを見て、彼らの信じている宗教に関心を持った日本人は、宗麟の他にもいたと思う。しかしながら、その中で、宗麟のようにポルトガル人の信仰の究極の存在に関心を示し、キリスト教に対する知的な姿勢に対して、異教の神の威力を借りて土地の魔を払おうとする、一般民衆の現世利益的な姿勢も伺える。

1551年8月に、日本の鹿児島、平戸、山口、京都、豊後で布教活動を行っているザビエルは、豊後で領主大友宗麟と会見し、後に宗麟は二番目の妻ジュリアと娘キンタと共にカトリックへ改宗した。

### 三

1546年に、ポルトガル商人アルヴァロ・ヴァス・ドン・エルナンド、ジョルジェ・アルヴァレスらの3艘の商船は、日本の薩摩地方に来航した。薩摩人であるアンジローが郷里で人を殺したことで官憲に追われていて、寺院に身を隠していた時のことである<sup>8</sup>。『アンジロー書翰』によって、その当時のことを示されている。

この頃、同地に取り引きに来ていたポルトガル人たちの船が一艘停泊していました。これらの人々の中にアルヴァロ・ヴァスという者がおり、私は彼を以前から知っていました。彼は私に起こった出来事を知って、かの土地（マラッカ）へ来るつもりはないかと尋ねましたので、私はそのように望んでいると答えました。彼は先を急がず、まだ艤装もしていなかったため、おなじ海岸の別の港にいて、その時まさに出発しようとしていたドン・エルナンドという紳士に宛てた書翰を与えよう、と言いました。<sup>9</sup>

この書翰で注目すべきなのは、助けを求めたアンジローとヴァスとが旧知の間柄であったことである。このことはアンジローが偶然に行き当たりばったりでヴァスのところに行ったのではないことを示している。まず、アンジローは当時片言のポルトガル語を話せたというから、商人あたりではなかったと推測される。すでに前節で見たように、滞日中のポルトガル人の立ち居振る舞いや信仰が日本人に感化を与えたように、アンジローもヴァスの日ごろの行動や信仰ぶりを通して、彼であれば自らの窮地を救ってくれるものと、彼の人間性に期待して、頼って行ったものと考えられる。その結果、アンジローの予想通りであり、解決策としてマラッカ行きを勧められたのである。ヴァスがアンジローに救いの手を差し伸べた理由について考えてみると、彼は遠い先のことを思って提案したのではなく、官憲に追われている、切迫した状況から救おうという人道的配慮からの行動であると思われる。

『アンジロー書翰』によれば、アンジローは、エルナンドの船ではなく、誤ってジョルジェ・アルヴァレスの船へ行ってしまう、その船でマラッカへ行くことになった。しかし、同地には、アルヴァレスから会うように勧められたザビエルが不在であったので、アンジローは日本へ帰国しようとし、再度、中国の港に戻った時、アルヴァロ・ヴァスと再会することになった。この後のことは、『書翰』に次のように記されている。

チナへ戻った際、私の土地で初めて私と関わり、私に（マラッカ行きを）勧めた、アルヴァロ・ヴァスと出会いました。彼は私がマラッカから戻ってきたこと、天候が私たちをここへ引き戻したことに驚きました。彼はマラッカへ向かう船にいましたので、一緒に戻ろうと言いました。そのようなことをロレンソ・ボテロという人からも勧められました。そして（こ

これらの身分ある人々は、もし私がマラッカへ戻れば、そこでついにパードレ・マエストロ・フランシスコとお会いでき、そこからゴアの聖パウロ（学院）へ行って信仰を学べるであろうし、さらに誰かパードレが私と一緒に日本へ渡るであろう、と思われる、と言いました。私は彼らの言うことがもっともであると思ひ、喜んでこの航海を行うことにしました。<sup>10</sup>

ヴァスはそのようなアンジローに再度マラッカ行きを進めたことは、次のような三つの意義があると、岸野久氏の研究から示されている。

- (1) マラッカへ戻れば、念願のザビエルに会えること。
- (2) ゴアの聖パウロ学院へ行けば、信仰について学べること。
- (3) 宣教師に同伴して日本へ戻ること。<sup>11</sup>

第(2)点について、アンジローのゴア行きと聖パウロ学院での教理学習のアイデアは、日本布教を思い立ったザビエルの発案によるものと、従来の研究から考えられてきた。ところが、このアイデアは、ザビエルとアンジローがマラッカで出会う以前に、すでに商人ヴァスが考えていたことであった。

#### 四

当時のポルトガル商人では、ザビエルの日本開教の最大の功労者といえるのはジョルジュ・アルヴァレスである。『アンジロー書翰』に「ジョルジュ・アルヴァレスは私（アンジロー）を伴い、大いに歓待し、進んで私をパードレ・マエストロ・フランシスコに託そうと企てました。」とあるように<sup>12</sup>、アンジローとザビエルの出会いに準備したのはアルヴァレスである。この出会いは日本キリスト教歴史上では、「画期的な意義があり、光り輝く第一ページと呼ばれる」事件になった<sup>13</sup>。二人の出会いから、ザビエルはアンジローに対し、さらに、まだ足を入れなかった日本、その土地や住民に大きな興味を持つようになった。海老沢有道博士は「ヤジロウ考」において、

このヤジロウの才能と信仰と、故国に福音を伝えようとする熱情は、じつにザヴィエル聖人をして日本に来たらしめた最大動機の一つであったのであり、ヤジロウの最大の功績と称すべきであろう。<sup>14</sup>

とある。ザビエルは、アンジローと会見していろいろ話していく中で、それまで彼が遭遇してきたインド人やほかのアジアの人々とはまったく異質な人間を感じたようだ。彼がアンジローの中に見たものは、教養と礼儀と好奇心にあふれた人間だった。このアンジローとの出会いによって、彼はついに日本行きを決断することになった。1549年6月にアンジローら3人の日本人を同伴しマラッカを出港し、その年の8月に鹿児島島の錦江湾に到着。こうして、ついにキリスト教が日本に上陸したのである。アンジローらは洗礼を受け、最初の日本人キリスト教徒と

なる。日本布教の準備のため、彼らは大変ザビエルの役に立った。アンジローはポルトガル語を習得していたため、教理書などの日本語への翻訳にあたった。では、アルヴァレスがアンジローをザビエルに引き合わせる原因について考えてみよう。

アルヴァレスは、常に有望な布教を求めてやまないザビエルの大名を熟知して、すでに異教徒改宗に情熱を燃やしていた。このようなアルヴァレスは、1546年日本に滞在し、日本人を理性的な国民とみて、日本人への布教が有望であると判断し、このことをザビエルに伝え、日本布教を勧めたいと思っていたことであろう。そのような時、人を殺し、役人に追われ、その罪の責めに悩むアンジローがアルヴァレスの所に救いを求めてきた。マラッカへの航海中、アルヴァレスはアンジローの才能と人柄、ポルトガル語能力を知り、彼をマラッカへ伴い、ザビエルに日本布教を勧める際の証人として最適な人物であると判断したようだ。

ここで、商人であるアルヴァレスはなぜザビエルに日本開教を勧めようとしたのか、という疑問が出された。史料から見れば、およそ二つの理由が考えられる。最大の理由は、彼が貿易商人であることから、日本がキリスト教化すれば、宣教師が駐在し、またキリスト教徒の日本人が増えることによって、自分たちの貿易活動にとって有利になる、という商人としての打算があったことは間違いない。あと一つは、異教徒を改宗させ、彼らに救いを与えようというキリスト教徒としての良心、あるいは使命感もあったと思われる。単なる計算づくのことであったら、自らの身を危険にさらしてまで、アンジローの国外逃亡にかかわったり、自らの費用と犠牲を払って、アンジローをマラッカやゴアへ運んだりしなかったと考えられるからである。アンジローは次のように述べている。

(アルヴァレス)は、パードレの生涯と事跡を語ってくれましたので、私の心のうちに彼(ザビエル)にお会いしたいという望みが大きくなっていきました。<sup>15</sup>

アルヴァレスは、アジア各地で「聖なるパードレ」として令名の高いザビエルの人となりや活動について語った。このことは、ザビエルと会いたいというアンジローの気持ちをますます高揚させたのである。さらに、『アンジロー書簡』に、

航海中、このジョルジェ・アルヴァレスはキリスト教徒とはどのようなことか、教えてくれましたので、私は洗礼を受けようという気持ちが多少起こってきました。そしてこの望みはだんだんと大きくなっていきました。<sup>16</sup>

とあるように、アルヴァレスはキリスト教理についてもアンジローに説明した。アンジローは、キリスト教の手ほどきを受けるにつれ、その教えの体現者とも言うべきザビエルに会って、かつて犯した罪の赦しを得て、心の平安を取り戻したいと願うようになった。このようにして、アルヴァレスは、アンジローの初期教化に成功したのである。

その後、アルヴァロ・ヴァスは中国の港で、ザビエルに出会わなかった、日本に戻りしようとしたアンジローに会った。彼はアンジローのどこか変わったことが感じた。これはアルヴァ

レスの感化であることをアンジローから知ったに違いない。ザビエル書翰に、

日本から帰ってきたポルトガル商人のすべてが、もしも私（ザビエル）が日本へ行けば、日本人は理性豊かであるから、インドの異教徒よりも、主なる神にもっと大きな奉仕となるであろう、と言っています。<sup>17</sup>

とあるように、日本開教は、日本帰りの多くのポルトガル人の共通の思いであったと考えられる。商人たちは一つ一つ繋がっている輪のように、積極的にアンジローとザビエルの出会うための道を進んでいた。ザビエルは書翰で続けて次のように述べている。

彼ら（ポルトガル商人）の考えでは、その島で私たちの信仰を広めれば、日本人はインドの異教徒には見られないほどの旺盛な知識欲があるんで、インドのどの地域よりもずっとよい成果があがるだろうとのこと。<sup>18</sup>

アルヴァロ・ヴァスの日本人評はザビエルを動かし、「もしも日本人すべてがアンジローのように知識欲が旺盛であるならば、新しく発見された諸地域の中で、日本人はもっとも地域欲の旺盛な民族であると思います。」とあるように<sup>19</sup>、史料で証明された。そして、「私は心のうちに、私自身かあるいはイエズス会の誰かが、2年以内に日本へ行くようになるだろうと思います。」と日本布教を決意するに至ったのである<sup>20</sup>。

アルヴァロ・ヴァスはザビエルに日本布教の有望さを説くばかりではなかった。彼はザビエルの要請に応じて、「日本情報」を執筆した。ザビエル書翰に、

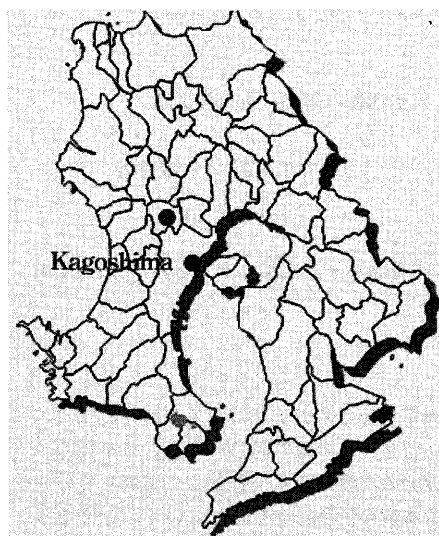
私は彼に対し、その土地や住民、実際に見たこと、信用できると思われる人々から聞いたこと、などについて報告書を作るように依頼しました。彼は詳細な報告書を書いてくれました。<sup>21</sup>

とある。この「日本情報」は、ザビエルにとって日本を知るための基礎資料となったばかりでなく、日本開教に向けて、インドやヨーロッパの教会関係者、さらにインド総督をはじめ植民地高官たちに理解と支援を得るための資料となった。

日本に向けてのアルヴァロ・ヴァスの最後の仕事はアンジローをゴアへ運ぶ役であった。ザビエル書翰に、

私（ザビエル）は、この日本人が私の乗ってきた船で来たら、とても嬉しかったですが。ところが彼はインドへ来ようとしていた他のポルトガル人たちと知り合いましたし、以前（彼らから）多くの名誉と友情を受けていましたので、彼は彼らと同行しないのはよくないと思ったからです。<sup>22</sup>





ザビエル来日発端の地



ザビエル会見記念碑

とある。すなわち、ザビエルはアンジローをインドへ同伴しようとしたのであるが、アンジローはザビエルの意に従わず、あえてアルヴァロをはじめとするポルトガル商人たちとの同行を望んだのである。このエピソードは日本開教に果たしたポルトガル商人の役割の大きさを示しているのではないか。ザビエルがアンジローの意向を尊重したのも、ポルトガル商人たちの働きを十分に評価していたからであろう。

## 五

以上の4節で述べたことから、日本の早期開教のことが三つほど分かるようになった。まず、1543年～1549年、ザビエルの日本開教に直接的・間接的に関わったポルトガル商人として、ジョルジュ・デ・ファリア、ディオゴ・ヴァス・デ・アラガン、エルナンド、アルヴァロ・ヴァス、ロウレンソ・ポテリョ、ジョルジュ・アルヴァレスなど、6名が判明できる。次に、その中でも、アルヴァロ・ヴァス及びジョルジュ・アルヴァレスの日本開教に向けての働きが強調されるべきである。

弥次郎及びザビエルの早期開教に対して実質的な協力をした6人のポルトガル商人の活動に関する考察を通じて、筆者は、この6人は事実上非組織的な集団行動を成し遂げたと考えている。つまり、これは個人的な支持や協力よりも集団的な性質を呈している。岸野久(1998:36)でも指摘されているように、この6人のポルトガル商人の間に見られた積極的で「チームワーク」<sup>23</sup>のような連携プレーがなければ、一連の行動が発生することはできなかったに違いない。彼らポルトガル商人の間には、日本開教という共通目標に向けて、必ずしも意志統一があったわけではないが、その実現に向けて、一種の集団的な傾向を呈した一連の行動が認められる。

従来の研究では、日本開教の発端はマラッカでのザビエルとアンジローとの「歴史的な出会い」とされてきたが、その出会いを成功させるに至るポルトガル商人たちの、日本開教に向けての働きを評価する必要もあろう。

## 参考文献

- 海老沢有道 (1970) 『日本キリスト教史』 日本基督教団出版局  
岸野 久 (1989) 『西欧人の見た日本発見——ザビエル来日前 日本情報の研究』 吉川弘文館  
岸野 久 (1998) 『ザビエルと日本』 吉川弘文館  
ジョアン・ロドリゲス (1978) 『大航海時代叢書 X・日本教会史・下』 (土忠井生等訳)、岩波書店  
威 印平 (2003) 『日本早期耶穌会史研究』 商務印書館  
新村 出 (1941) 『日本吉利支丹文化史』 地人書館  
東京大学史料編纂所 (1998) 『日本関係海外史料・イエズス会日本書翰集・訳文集 (上・下)』 東京大学出版会

## 注

- 1 フランシスコ・ザビエルはイエズス会の創始者の一人。1506年現在のスペインのバスク地方のザビエル城で領主の息子として誕生。彼は学問を志し、パリ大学へ留学。その地で同じバスク人で年長のイグナティウス・ロヨラに出会う。ザビエルは初めころは教会の司教になり学者として出世していこうと考えていたが、ロヨラの熱心な説得でついにキリスト教布教の活動に身を賭していくことになった。ロヨラは同士6人を集め、誓いを立てた。1543年8月のこと、イエズス会の誕生の時であった。
- 2 ジョアン・ロドリゲス『大航海時代叢書 X・日本教会史・下』(土井忠生等訳)、岩波書店、1978年第3版、p. 291.
- 3 岸野久『ザビエルと日本』、吉川弘文館、1998年、p. 24.
- 4 東京大学史料編纂所『日本関係海外史料・イエズス会日本書翰集・訳文集 (上)』東京大学出版会、1998、p. 266-268.
- 5 Jap. Sin., 8, 93v. Schurhammer, *Orientalia*, p. 533.
- 6 東京大学史料編纂所『日本関係海外史料・イエズス会日本書翰集・訳文集 (上)』東京大学出版会、1998、p. 422.
- 7 ジョアン・ロドリゲス『大航海時代叢書 X・日本教会史・下』(土井忠生等訳)、岩波書店、1978年第3版、p. 584-585.
- 8 アンジロー、ヤジローとも。薩摩の人と伝える。殺人を犯し、薩摩山川に停泊中のポルトガル船に逃げ込み、船長アルヴァレスの援助で日本を脱出、1547年マラッカでザビエルに会い、ザビエルの日本布教の契機となる。翌年ゴアの聖パウロ学院で学び受洗、パウロの洗礼名を受ける。日本人最初のキリシタン。アンジローのキリスト史上の位置づけは、ザビエルの先導者、案内者とするのが大方の意見である。
- 9 Biblioteca da Ajuda, *Jesuitas na Asia*, 49-IV-49, f. 62v.
- 10 Biblioteca da Ajuda, *Jesuitas na Asia*, 49-IV-49, f. 63.
- 11 岸野久『ザビエルと日本』、吉川弘文館、1998年、p. 31.
- 12 Biblioteca da Ajuda, *Jesuitas na Asia*, 49-IV-49, f. 62v.
- 13 海老沢有道著『日本キリスト史』、塙書房、1990年、p. 26.
- 14 海老沢有道著『増訂切支丹史の研究』、塙書房、1971年、p. 240.
- 15 岸野久『ザビエルと日本』、吉川弘文館、1998年、p. 32.
- 16 岸野久『ザビエルと日本』、吉川弘文館、1998年、p. 33.
- 17 G. Schurhammer et I. Wicki, op. cit., Tomus I, 1944, p. 392.
- 18 岸野久『ザビエルと日本』、吉川弘文館、1998年、p. 33.
- 19 岸野久『ザビエルと日本』、吉川弘文館、1998年、p. 34.
- 20 岸野久『ザビエルと日本』、吉川弘文館、1998年、p. 34.
- 21 岸野久『ザビエルと日本』、吉川弘文館、1998年、p. 35.
- 22 G. Schurhammer et I. Wicki, op. cit., Tomus I, 1944, p. 391.
- 23 岸野久『ザビエルと日本』、吉川弘文館、1998年、p. 36.

(原稿受理 2008年9月1日)